

# 7. 駅通と駅弁当

## 米田きよ

※明治30年5月3日生、石川県出身

私は、明治45年に、郷里石川県小松から、米田久作のもとに、数え年15才で嫁いできました。まだ子供でしたので心細くて、泣き明したこともあります。それだけに、駅通のことについては余り分りません。

夫の久作は、米田家の三男で、駅通の名儀も父久三郎でした。開設当時から、夫の義兄に当る川村留吉が、駅通の管理や、造材の帳場などしていたそうですが、私が嫁に来たときは居りませんでした。

駅通には土産子馬が10頭ほど居て、一ノ橋や中興部の駅通まで、郵便小包の通送や、入殖者の荷物運搬をしておりました。旅人には乗馬の貸付もして、次の駅通まで乗り付けて、こちらに来る旅人が、また乗って備えるようになっていました。

土産子馬の中に狡いのが1頭いて、旅人を途中まで乗せて行き、嫌になると振り落して逃げて帰り、折角途中まで行った旅人が、蒼くなって馬のあとを追って引返してきたことがあります。

私の来た年に、石原長官が視察に見え、駅通に1泊しました。皆、足が土に届くような小さな土産子馬に乗って来たが、道が悪くてとても馬車などには、乗れなかったでしょう。

こんな偉い人が泊っても、これと言うご馳走もできず、やまべの焼もの、ニラのゴマ和え、いもの三平汁、フキとワラビに油揚げとコンニャクを入れた煮つけなど、土地でとれたものを恐る恐る出すと、「刺身などは食べようとは思っていない。山菜料理は大変おいしい」と褒められ、一安心したものです。

この時、部落を代表して、佐久間のじいさ（今朝次）が、羽織、袴で出迎え、ご機嫌伺いをしたのをよく覚えております。

その時、石原長官の使った盃を、記念にとつてありますが、今、駅通の想出に残るのは、これ一つしかありません。

駅通の宿泊料は、上、中、下とあって、上は70銭位で役人が多く、商人は中で60銭位、一般入殖者は50銭ほどでしたが、昼の弁当もつけたりして、余り儲けにはならないようでした。

駅通の台所には、何時も米が10俵（60キロ入り）ほど、酒は4斗樽で上げてあり、春には蟹を沢山仕入れて、5升がめに身をむいて酢をかけておき、これを料理に使いました。

駅通のお客は、多い時は60人位のときがあり、土方が団体で30人ほど泊ったこともあります。この時、私は土方が逃げないように、寝ずの番をさせられた、辛い思い出があります。なかには、宿賃も支払わず、宿の「ゆかた」を着て逃げて終い、部屋にシラミの沸いたポロポロの服みたいなものが脱ぎ捨ててあり、余りにも汚ないので、棒ではさんで投げたこともあり、本当にいろいろな事がありました。

大正4年に、上興部に局が出来てから、通送がなくなり、駅通の近くで、米田澱粉工場を始めました。大正6、7年ころでしょう。

鉄道の開通と同時に駅通が廃止になり、市街の駐在所（消防会館向い）附近で、お菓

子屋を始めました。

この頃の名寄線は、石北線が開通前なので、函館行の直通客車が通っており、上興部駅は、国境を控えて機関庫もあり、重要な駅でした。

駅の立ち売りの許可を取って、駅の弁当店を始めたのは、大正14年で、名寄線では、渚滑で立ち売りがあるだけでした。

やまべ寿司、こくわ餅をこの時から売り出しましたが、未経験なため、初めは大変苦労しました。当時は冷蔵庫もなく、少しやまべの鮮度が落ちると使いものにならず、大損をしたことがあります。

その頃のやまべ寿司は、道内では初めてのようで、札幌の物産展に出品して、入賞したことがあります。

こくわ餅は、郷里石川県小松市に大変おいしいあんころ餅があったので、これを思い出して作り始めたら、大変な人気で、やまべ寿司と共に名物になり、お客さんに喜ばれたものですが、興部に来てからは余り人気がありません。

駅通と言ひ、駅弁と言ひ、苦勞の仕通しでしたが、今はただ懐しい思い出となっております。

米田和也談

上興部での駅弁廃止の動機は、急行紋別が上興部に停車しないことが判明した時からで、西興部に出ようかとも思ったが、人口の過疎化が目立つようになったので、急行紋別が運行される前年（昭和36年11月）に、興部に出て来たのです。

※米田駅逦は、上興部17線（東興秋田の沢川の出口）の、元春日三雄の住宅の附近に建設されていた。